



フォレスト 支援 METHOD

◆5領域の働きを育てる発達支援

私たちが提供する発達支援の目指す最終目標は、お子様が保育所や学校、将来働く会社等、地域社会(環境)に適応して生活できるようになることです。

それぞれの環境に適応する素地をつくることで、他者との関係性や様々な学習をより深め、自らの目標達成に向けて歩みを進めることができます。

◆ “子ども”と“環境”的な相互的なやりとりのサイクル

子ども

反射・反応・行動

外界側

5領域の働きからみた情報処理モデルと発達支援

外界からの刺激や動きかけに対して、下記5つの★の領域が、相互に連携/作用して働くことで、お子様の反射/反応や行動【例】友達とゲーム等をして遊び、着席して授業に参加する等】が引き起こされます。フォレストサウンドの発達支援では、これら5つの★の領域の働きを高めることに加えて、環境調整や未学習等への手当を行うことで、それぞれの状況に適応した反応や行動を引き出せるように支援します。

★認知・行動

情緒の安定、行動統制
弁別機能の拡充、表象機能の獲得
数量理解、文字理解、概念形成

★運動・感覚

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚
平衡感覚、固有感覚
ボディイメージの形成
粗大運動、微細運動
※情動の安定化
※外界との交渉の拡大

★健康・生活

食事、排せつ、着替え、自己管理
年齢相応の生活様式の獲得

★人間関係・社会性

対大人・対子ども関係理解
集団行動 メタ認知形成

★言語・コミュニケーション

言語理解・言語表出
前言語機能(模倣行動・指さし理解等)
非言語コミュニケーション

環境整備(構造化) 視覚支援

シンプルでわかりやすい日課、視覚提示や構造化の技法を用いた予定や作業内容の提示を行います。

未学習や誤学習への支援

お子様の特性に合わせた環境をつくることで、それぞれの発達段階で必要な学習体験の積み重ねの促進の他、誤学習を防ぐ為の配慮を行います。

お子さま側

環境から入る様々な
刺激や働きかけ

人は五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)の他、初期感覚【固有感覚(筋肉や腱の収縮を感じる)、平衡感覚(バランス感覚)、触覚(初期感覚にも含まれる)】を使って外界や自分の姿勢や動作状況等を認識します。脳は様々な感覚情報の中から必要な情報を瞬時に選択・思考して状況を判断し、声や表情、四肢を使って、状況に応じた行動をアウトプットします。

私たちは、5領域への支援を通して、それぞれの領域の働きを高め、領域同士の連携を活発にして、状況に合わせた最適な行動をとれるようにします。

さらに、環境に適応することで、ご家族や友人、職場の仲間と一緒に日々の生活を穏やかに、楽しみながら、達成感を得ながら過ごせるようになることを目指します。

◆発達支援のプロセス

①お子様の「困った！」行動には必ず理由があります。

例えば…

- ・保育園・幼稚園や学校でみんなと一緒に行動ができない。
- ・噛みつきや引っ掻き、暴言等、暴力的な行動や言動が絶えない。
- ・日課の変更が苦手。思い通りにいかないとパニックになる。
- ・言葉や認知の発達が気になる。
- ・手先が不器用。運動が苦手。

お子様の「困った！」行動…

そこには、発達水準特有の行動特性、障がい特性、環境要因等が見え隠れしています。

私たちは、困った行動の根本的な原因を見極めながら、発達水準・障害特性に合った課題提示の方法、感覚や思考の特性による躊躇の解消を行いながら、困った行動を減衰・減弱させたり、発達を促していくことで“困った行動”にアプローチしていきます。

②お子様の困った行動の背景にある“要因”と“5領域との関連性”

お子様の「困った！」行動について、5領域からアプローチ。

●生活リズムと身辺自立の確立

【健康・生活】

支援を行う前にまず必要なこと。それは、お子様のコンディションをベストな状況に整えることです。その為には、食事や睡眠、排せつ等、生活のリズムを安定させる必要があります。

例えば、体調がすぐれない状態、眠い状態等では、どんな支援を行っても狙った効果が得ることは難しくなります。毎朝決まった時間に起きる。お腹が減ってご飯を食べる。排せつをする。ゆっくり寝て疲れた体を休める。生活のリズムを整えることは発達支援のベースとなります。

また、発達水準相応の自立（トイレ、着替え、排せつ、入浴等）の獲得も大切な要素となります。

●感覚情報を通して自分と外界を適切に捉える

【運動・感覚】

視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、平衡感覚(バランス感覚)、固有感覚(筋肉の張を感じる感覚)等の感覚情報から、外界や自分の身体の状態を的確にとらえることは、運動発達、認知機能、言語理解、情緒発達、社会性の獲得等のすべての発達において非常に重要です。

例えば、皮膚感覚(触覚)の働きに過敏さがあると、人と触れ合うこと(急に触られたり、接近されること)を極端に嫌がることがあります。この場合、集団行動をとることは難しくなり、教室等で他のお友達と一緒に過ごすことを不快に感じることもあります。ストレスがたまり、場合によっては、相手を引っかいたり、噛みついてしまうこともあるでしょう。

また、抱っこ等のスキンシップを土台とした安心を感じることや人との信頼関係を構築することもできず、情緒のコントロールも難しくなります。

●ボディイメージを育てる

【運動・感覚】 【認知・行動】

ボディイメージとは、下記、3つの感覚情報を組み合わせて作り出す、自分の身体の輪郭のイメージや体を動かすときのイメージのことです。ボディイメージの発達は、器用さ、空間把握力、見分ける・見比べる力、文字や数学学習の獲得などに寄与します。

①固有感覚：全身の筋肉や腱の張り具合を感じる感覚

②触　　覚：皮膚に触れたり触った物の形、温度、硬度等を感じる感覚。

③平衡感覚：三半規管の中のリンパ液の流れや耳石器の動きから回転や加速度を感じる。

ボディイメージが育つことで空間認知能力も育ち、落ち着いて過ごすことができるようになります。より精密な動作コントロールを獲得し力の加減ができるようになります。

●コミュニケーション手段の確立

【運動・感覚】 【認知・行動】 【言語・コミュニケーション】 【人間関係・社会性】

言葉の学習は、相手を認識すること、見つけたものや感じたこと等を他者と共有することから始まります。初期は手差しや指さしをしたりすることから始まり、相手の話いや素振りを模倣する中で、語彙やコミュニケーション能力を身につけることができます。

言葉の獲得には、感覚機能の発達、音を正確に出す為に唇や舌、喉や呼吸の纖細なコントロールが求められます。さらに、三項関係や表象機能の確立（過去に見たもの等を頭の中で再度イメージする力）等、いくつもの能力が求められます。

● “見通しを持つこと”と“自発的かつ適応的な行動を引き出すこと”

【運動・感覚】 【認知・行動】 【言語・コミュニケーション】 【人間関係・社会性】

「見通しをもつこと」

例えば、作業を依頼されて取り組むとき、電車を待っているとき等に「あとどのくらいで終わる」「何分に到着する」等のイメージが持てないとどうでしょう。やはりストレスを感じるのではないでしょうか？

終わりが分かること、スケジュールを把握して見通しをもつ事で、目の前の作業に集中して取り組んだり、安心して過ごすことができます。

自閉症スペクトラムでは、障害特性により、1日の生活の流れ等の、スケジュールを頭の中でうまくイメージ化できることや、発達水準によっては、自分の思い通りに日課や作業ができないと不安になる方が多くいます。

そのような場合は、障がい特性や認知発達水準に合わせて、スケジュールを視覚化して提示したり、シンプルな日課にして繰り返し取り組むことで、1日の活動の流れを体験的に覚えられるようにします。

“何をどのくらいするのか” “いつ終わるのか” を明確化することで、見通しと安心感を得て過ごせるようになり、さらにそこから自発的な行動や適応的な行動を引き出すことも期待できます。

※上記は一例です。



フォレスト 支援 METHOD

◆具体的な支援方法の一例 ※【】の中は、対応する領域名です。

①タッチング（触覚等感覚アプローチ）

【**感覚・運動、認知・行動、人間関係・社会性、言語・コミュニケーション**】

※タッチング：作業療法士：木村順先生考案

様々な素材を手の平から肩部分にかけてタッチしていきます。その関わりの中で、触覚の働きのうち、識別系の働きを引き出していく。併せて、相手とのやりとりについても学んでいきます。情緒の安定、眼球コントロール、対人関係、言語・コミュニケーションの向上が見込まれます。

②サーキット運動、統制、ほんき、挑戦

【**感覚・運動、認知・行動、言語・コミュニケーション、人間関係・社会性**】

全身を全力で使って環境にかかわる中で、自分の身体の輪郭のイメージ（ボディイメージ）や姿勢の作り方、コントロール方法（シェマ）、情緒コントロールを学んでいきます。

③グループ活動〈音楽活動、ゲーム〉

【**感覚・運動、認知・行動、言語・コミュニケーション、人間関係・社会性**】

グループダイナミクスを活用し、仲間との協力や協調性を引き出し、成功体験や達成感を積み重ねていく中で自己肯定感を育てていきます。

④教材学習

【**感覚・運動、認知・行動、言語・コミュニケーション、人間関係・社会性、健康・生活**】

方向づけ、形の見分け、大小、長短、比較、分類等、文字や数の学習や様々な概念形成を下支えする学習からスタートします。お子様の興味や関心、発達水準に合わせて課題に取り組んでいきます。ボタンはめ等、日常生活の練習等の課題にも取り組みます。

⑤言語聴覚士等による個別指導

【**言語・コミュニケーション、認知・行動、人間関係・社会性**】

表象機能、音韻理解や構音の躊躇の分析から構音訓練などの個別指導を行います。構音訓練は、椅子に座って対面で行うプログラムの他、小さなお子様には、食べ物などを使って楽しみながら舌や唇のコントロールを学べるよう工夫しています。

⑥作業療法士等による個別指導

【**感覚・運動、言語・コミュニケーション、認知・行動、人間関係・社会性**】

ハンモックや回転椅子、トランポリンなどを使った個別指導などに取り組みます。ボディイメージの発達、視覚や聴覚の働きを下支えする「平衡感覚」、「固有感覚」、「触覚」に対するアプローチを中心に行います。

⑦公認心理師等による個別・集団指導

【**言語・コミュニケーション、社会性・行動**】

SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）などの手法を用いて、学校や友人との関係など、日常生活で求められる対人スキルの獲得を目指します。